

『西鶴諸国はなし』 綜覧

— 成立論・方法論への手掛かりとして —

宮澤 照 恵

『西鶴諸国はなし』は五巻三十五の咄から成る。これらは、序に示された「人はばけもの世にない物はなし」という意識の下に統一ある諸国奇談集の型になつてはいるものの、題材・方法・性格など、どれを取つても単一の咄意識に納まるわけではない。いわば、雑多な混合物といった一面を有することも、また事実である。ここで改めて作品の多様性を腑分けし、分類整理することは、『西鶴諸国はなし』の内実に——加えて西鶴の当初意図していた咄の本（大下馬）の本質に——近づく上で不可欠な補助線と考えられる¹⁾。

これまでの研究に目を向けると、『西鶴諸国はなし』の文学史上の位置付けを急ぐあまり、本書を同一レベルの創作意識に収斂させて論じようとする弊害が、作品論・成立論において見られたように思われる。例えば、先行する特定の一作品の影響下に、本書の創作意図を見ようとする試みなどに、例外を軽視する傾向が見られるごときである。更に言えば、『大下馬』『近年諸国咄』『西鶴諸国はなし』という三つの書名を有する特殊事情の問題を含め、成立論の構築は、本書の多様性を認識することを抜きにしては考えられないである

う。あるいは、また、本書の読みの可能性の一つとしてしばしば繰り返されて来たところであるが、本書に「西鶴の創作方法の原初的な姿」を見、それを探求しようとする立場に立てば、本書に見られる題材や方法の多様性は、最も注目すべき要素となるう。

本稿がサブタイトルを「成立論・方法論への手掛かりとして」としたのは、筆者の問題関心の方向も、編集・創作意図を含めた成立問題にあり、また、西鶴の咄の方法の解明にあるからである。従って、本稿における分類・整理の方法、補助線の引き方も、自ずから内容の傾向や方法に目を向けたものとなっていることを予めお断りしておく。

なお、「西鶴諸国はなし」を一括して論じようとするれば、その発想や方法の解明にあたって、素材および素材離れの様相を視野に入れねばならないのは言うまでもない。しかし、私見ではこれらはいずれも探求の段階であり、一編一編さらなる論議を必要とするものと思われる³⁾。筆者も個別には用意が無いではないが、素材に関する言及は本稿の基礎作業からは外すこととした。

以下、論述の手順として、各要素を

(イ) 目録や丁数といった外的形態

(ロ) 内容からみた三十五話の基本的性格

(ハ) 表現や構成など、主として方法に関わる諸側面

の三つのグループに分け、この順にそれぞれのグループの各項目ごとに図あるいは表を掲げ、解説を加えながら話を進めたい。

言うまでもなく、これらは厳密な区分けが出来るものではなく、それぞれが相互に密接に関連しあっている。右の手順は便宜上のものであって、本稿の目的は、あくまで全体を見渡すことにある。そこで、末尾に各項目を総合した表を掲げることとした(但し、スペースの関係で図1、副題、現実性の内容、大笑い・おかし、戯画・想像画、教訓・評等の項目を省略した)。

なお、表の解説範疇に属するものの中で、本稿では論じ尽くせず、今後具体的な咄の検討を含めた形で個別に論ずる必要のあるものや、問題が大きく多岐に亘るために別途独立して論じたいと考えているものを、右の(イ)〜(ハ)の関連する箇所とともに前以て提示しておく。

○内容に関する「笑話性」や「怪異性」「現実性」などの分析および方法との関係 (ロ) (ハ)

○地域の設定と、素材および内容・方法との関係 (ロ) (ハ)

○咄における俳諧性の問題——個々の作品分析を通して—— (ロ) (ハ)

○咄の方法へのアプローチのうち、特に章末が果たしている機能の分析 (ロ) (ハ)

○本書と先行作品との影響関係、あるいは『宗祇諸国物語』との関係など、成立や創作意図をめぐる諸問題 (イ) (ロ) (ハ)

以上、先走るようではあるが、五つのテーマを示した。このことは、本稿で表示する各項目の設定そのものが、筆者のどのような問題意識に繋がるものであるかを表明したことでもある。以下(イ) (ロ) (ハ)のグループごとに節を設けて具体的な項目説明に入るが、其の際、各項目を設定した意義、および記号や記述内容の基準といった、図あるいは表を読み取るための解説を中心に述べ、必要に応じて考察を加える形をとりたい。なお、本稿の性格上、既に本書の諸解説などで触れられている基本事項の確認も含まれ、この点で先学の御指摘と重なる部分のあることも予めお断りしておきたい。

二

本節では『西鶴諸国はなし』の外的形態として、目録と全体の構成に着目する。これらは三十五章を腑分けし、本書の性格を考える手掛かりとして有効と思われる故である。図1では全体の構成を見るために、各

『西鶴諸国はなし』総覧

巻 1	巻 2	巻 3	巻 4	巻 5
1オウ 序	1オウ 目録	1オウ 目録	1オウ 目録	1オウ 目録
2オウ 目録	2オウ 本文 卷二の一	2オウ 本文 卷三の一	2オウ 本文 卷四の一	2オウ 本文 卷五の一
3オウ 本文 卷一の一	3オウ 挿絵	3オウ 挿絵	3オウ 挿絵	3オウ 挿絵
4オウ 挿絵	4オウ 本文 卷二の二	4オウ 挿絵	4オウ 本文 卷四の二	4オウ 本文 卷五の二
5オウ 本文 卷一の二	5オウ 挿絵	5オウ 本文 卷三の二	5オウ 挿絵	5オウ 挿絵
6オウ 挿絵	6オウ 本文 卷二の三	6オウ 挿絵	6オウ 本文 卷四の三	6オウ 本文 卷五の三
7オウ 本文 卷一の三	7オウ 挿絵	7オウ 本文 卷三の三	7オウ 挿絵	7オウ 本文 卷五の四
8オウ 挿絵	8オウ 本文 卷二の四	8オウ 挿絵	8オウ 本文 卷四の四	8オウ 挿絵
9オウ 本文 卷一の四	9オウ 挿絵	9オウ 本文 卷三の四	9オウ 挿絵	9オウ 本文 卷五の五
10オウ 挿絵	10オウ 本文 卷二の五	10オウ 挿絵	10オウ 本文 卷四の五	10オウ 挿絵
11オウ 本文 卷一の五	11オウ 挿絵	11オウ 本文 卷三の五	11オウ 挿絵	11オウ 本文 卷五の六
12オウ 挿絵	12オウ 本文 卷二の六	12オウ 挿絵	12オウ 本文 卷四の六	12オウ 挿絵
13オウ 本文 卷一の六	13オウ 挿絵	13オウ 本文 卷三の六	13オウ 挿絵	13オウ 本文 卷五の七
14オウ 挿絵	14オウ 本文 卷二の七	14オウ 挿絵	14オウ 本文 卷四の七	14オウ 挿絵・刊記
15オウ 本文 卷一の七	15オウ 挿絵	15オウ 本文 卷三の七	15オウ 挿絵	
16オウ 挿絵	16オウ 本文 卷二の八	16オウ 挿絵	16オウ 本文 卷四の八	
17オウ 本文 卷一の八	17オウ 挿絵	17オウ 本文 卷三の八	17オウ 挿絵	
18オウ 挿絵	18オウ 本文 卷二の九	18オウ 挿絵	18オウ 本文 卷四の九	
19オウ 本文 卷一の九	19オウ 挿絵	19オウ 本文 卷三の九	19オウ 挿絵	
20オウ 挿絵	20オウ 本文 卷二の十	20オウ 挿絵	20オウ 本文 卷四の十	
21オウ 本文 卷一の十	21オウ 挿絵	21オウ 本文 卷三の十	21オウ 挿絵	
22オウ 挿絵				

図 1 各巻の本文・挿絵の割り付け

巻の本文・挿絵の割り付けを掲げ、表1では目録の記載と本文の丁数を一覧表にした。以下、表の記載順と論述の順序に若干の違いがあるが、各項目を一瞥しておく。

《本文丁数》表1(参照 図1)

本文の丁数を示す。各章おおむね一丁半〜二丁で、分量的に際立って多いのが巻一の三の「三丁」、次いで二・五丁の章が八章ある。逆に際立って少ないのが、巻四の四の「一丁」である。なお、行数は一〇行で一定である。図1に全体の構成を示したが、目録及び巻一〜五の分量・形式は整然としており、巻四・五は巻一〜三に比べて、四丁少ない。

図1に示したように、本書の構成の特色として、一つの咄は必ず絵で終ること、第一章は目録の関係で丁のオモテから始まるが、第二章以下はすべて丁のウラから始まり、各話が見開き二枚又は三枚で完結するように操作されていることが挙げられる。絵を含めてみると、やはり巻一の三の四丁が際立って多く、巻三の一の三・五丁がこれに次ぐ。少ない方では巻四の四の二丁が目を引く。当代の「物語類」や「咄の類」の書と比べてみると、形式や長さをそろえる本書の意識は際立っていると言えよう。形式・分量共に、方法や成立を考える際の手掛かりの一つになる要素であると思われる。

《副題(諸国・地名)》表1

目録の副題をそのままに示す。この副題には「西鶴諸国はなし」各章の「諸国(咄の舞台)」が示されており、意図的斬新な目録形式である。北は奥州から南は筑前に至る二十に及ぶ諸国に互ること、三部(京都―三、江戸―四、大坂―二)と畿内で過半を占めることなど、既に指摘されている通りである。

「国名・地名」+「にありし事」といった形式に全体が統一されているが、最終章のみ「江戸にこの仕合せありし事」となっている。この章の章題が、巻頭第一章とともに例外的に体言止めになつてはいないことと

『西鶴諸国はなし』綜覧

表1 章題・小見出・副題(諸国・地名)・本文丁数

卷一の七	狐の四天王	○恨	播州 姫 路 にありし事	二
卷一の六	雲中の腕をし	長生	箱根山熊谷 にありし事	二・五
卷一の五	不思議のあし音	音曲	伏見の間屋町 にありし事	二
卷一の四	傘の御託宣	○慈悲	紀州の掛作 にありし事	一・五
卷一の三	大晦日はあはぬ算用	義理	江戸の品川 にありし事	三
卷一の二	見せぬ所は女大工	不思議	京の一条 にありし事	一・五
卷一の一	公事は破ずに勝	知恵	奈良の寺中 にありし事	一・五
卷・章	章 題	小見出	副題(諸国・地名)	本文丁数
卷二の一	蚤の籠ぬけ	武勇	駿河の国府中 にありし事	二
卷二の二	面影の焼残	○無常	京上長者町 にありし事	二・五
卷二の三	お霜月の作り髭	馬鹿	大坂玉造 にありし事	一・五
卷二の七	神鳴の病中	欲心	信濃の国浅間 にありし事	二
卷二の六	楽の男地藏	現遊	都北野の片町 にありし事	一・五
卷二の五	夢路の風車	○隠里	飛騨の国の奥山 にありし事	二・五
卷二の四	残る物とて金の鍋	○仙人	大和の国生駒 にありし事	二
卷二の三	水筋のぬけ道	報	若狭の小浜 にありし事	二・五
卷二の二	十二人の俄坊主	○遊興	紀伊の国あは島 にありし事	二
卷二の一	姿の飛乗物	因果	津の国の池田 にありし事	二

(六)

卷三の四	紫女	夢人	筑前の国はかたにありし事	二・五
卷三の五	行末の宝舟	無分別	諏訪の水海にありし事	二
卷三の六	八畳敷の蓮の葉	名僧	吉野の奥山にありし事	一・五
卷三の七	因果のぬけ穴	○敵打	但馬の国片里にありし事	二・五
卷四の一	形は昼のまね	執心	大坂の芝居にありし事	一・五
卷四の二	忍び扇の長歌	○恋	江戸土器町にありし事	二・五
卷四の三	命に替る鼻の先	○天狗	高野山大門にありし事	一・五
卷四の四	驚は三十七度	○殺生	常陸の国鹿島にありし事	一
卷四の五	夢に京より戻る	○名草	泉州の堺にありし事	一・五
卷四の六	力なしの大仏	○大力	山城の国鳥羽にありし事	一・五
卷四の七	鯉のちらし紋	○獵師	河内の国内助が淵にありし事	一・五
卷五の一	灯挑に朝貞	○茶湯	大和の国春日の里にありし事	一・五
卷五の二	恋の出見世	○美人	江戸の麴町にありし事	一・五
卷五の三	楽の鱗帖の手	生類	鎌倉の金沢にありし事	一・五
卷五の四	闇の手形	横道	木曾の海道にありし事	二
卷五の五	執心の息筋	○幽壺	奥州南部にありし事	一・五
卷五の六	身を捨る油壺	後家	河内の国平岡にありし事	一・五
卷五の七	銀がおとして有	○正直	江戸に此仕合ありし事	一・五

併せて、全体の中では破格であつて、「拳句」の特別意識をそこに伺うことができよう。

それぞれの土地の設定に関しては、内容・方法の領域にかかわることであるから、第四節で再び触れることにしたい。

《章題》表 1

目録の章題を示す。巻頭と巻末が例外的に主語・述語の私たちを取るが、他は体言止めで統一されている。この巻頭と巻末の特別意識は留意すべきである(巻四の五「夢に京より戻る」は変則的だが、「戻る」を連体形と取り、下に名詞(藤・花・名草)が略されている形と考えれば、他の三十二章と同列に扱うことができよう)。全体に工夫が見られ、意表をつく章題で、見立て(巻二の二、巻二の六など)、洒落(巻三の七、巻四の六、巻五の二など)、奇抜さ(巻二の五、三の六など)といった言葉遊びが散見される。軽口の気分が伺えるのであるが、一方で兼題による咄作りかと想像させるものもある。いくつか例を挙げると「見せぬ所」(巻一の二)、「御託宣」(巻一の四)、「俄坊主」(巻二の二)、「蚤の籠抜け」(巻三の一)、「八畳敷」(巻三の六)、「鱒鮎の手」(巻五の三)……といった具合である。「咄の点取り」の実態がつかめない以上、想像の域を出ないわけだが、兼題かと思わせるほど章題には連想を喚起する単語が散りばめられているということでもある。この「題が先行する」という発想は、次に挙げる小見出しにも流用出来そうである。何れにせよこの問題には、当時の咄のあり方、西鶴の咄の方法、成立過程の問題、「宗祇諸国物語」との関連などといった、様々な方面に広がる可能性が含まれていることを指摘しておきたい。

小見出しや副題との関連で言えば、三者一体の効果をねらっているが、中に平凡な繋がり過ぎないものもあるのは免れない。

《小見出し》表一

目録の小見出しを示し、本文に同一単語が見られるものには「○」を付す。

小見出しは、本書の特徴の一つとして、無視できない要素である。読者の側からすればその奇抜な分類命名に興をそそれ、想像力を刺激される、と同時に本書の咄の本としての話題材料の豊富さを印象づけられることになる。作者の側に立つて見ると、命名には遊びの気分も伴いながら、時には凝って、時には安易に三十五話それぞれの差異を——一つとして重なるモードは無いという自負を込めて——工夫していることは疑いない。目録に小見出しをつける形は、中世説話の部立て、遊女評判記の部類分け、仮名草子等々、先行例がないわけではない。だが、本書の場合は、例えば評判記の見立ての性格とは異質であるし、『知恵鑑』などに見られるような一定の基準による統一された形でもなく、西鶴独自の形式と言う他はない。一言でいってしまえば、一見非常に整然としているように見えて、その実、命名の尺度が多種多様なのである。以下、いくつかの側面から小見出しの性格を眺めておく。

命名の尺度であるが、「名僧・狛師・後家」といった登場する人物に焦点をあてたもの、「義理・慈悲・無常」などの抽象的概念を示すもの、「馬鹿・無分別・正直」といった性格評価、かと思えば「敵打・恋・茶湯」など、本文で扱っている題材そのものをストレートに示すものもある。真面目な題もあれば、遊びの気分が濃厚なものもあるのだが、この尺度の多様性は、小見出しが一律に主題を示しているわけではないことを示している。小見出しイコール主題と見做している論考を多く見かけるが、西鶴の誘いに安易に乗らぬ用心が必要であろう。

咄の内容との関係に目を向けよう。小見出しの言葉がそのまま本文に見出せる例は、巻四・五に多く見られる。その場合、巻一〜三の小見出しでは本文をひとひねりしているものが多いのに比べて、巻四・五ではその用い方に何のひねりもなく、本文中の単語をそのまま据えている上、ストレートに内容を指し示していると言えよう。今前者の例を挙げると、巻一の四では本文の「慈悲」がかし傘の形容として用いられ、観音の

慈悲を重ね合わせているのに対して、小見出しの「慈悲」は章末のエピソード（好色オチ）の「情もなし」をも含めた意味で用いられており、一話の中で「慈悲」の意味が変化していくことを踏まえたものとなっている。同様のひねりは「恨」（巻一の七）、「無常」（巻三の二）などにも見られる。総じて巻一〜三では、本文中の単語と小見出しが安易に重なることを嫌い、一方巻四・五ではそうした配慮が見られないばかりか積極的に本文中の単語を小見出しに用いる、といった傾向が伺われよう。

小見出しに見える「獵師」「後家」「美人」などの単語は複数の咄の中に登場し、「因果」「不思議」「無常」などの語も本書のそこそこでお目にかかる。内容から見ても、これらは特定の咄に限定する必然性がさほどある訳ではない。贅言は避けるが、これらがそれぞれ特定の咄と結び付いているのには、〈章題との連想範囲内にあり、章題と用語が重ならぬ場合〉、あるいは〈他の咄により適切な小見出しがある場合〉、〈当該咄には他に妥当な小見出しが考えにくい〉などの条件が考えられよう。いずれにしても厳密なものではない。

一話中の挿話との関係であるが、複数の説話が一つの咄の中に仕掛けられている際、「名僧」や「茶湯」のように一つの見出しに収斂される場合は問題がない。そうでなくとも咄に軽重があつて、小見出しが、中心となる咄にそつたものになつていけば混乱はない。だが、例えば、巻二の五「夢路の風車」のように奇談と隠里を取り合わせているような場合、小見出しに取られた「隠里」の方に主眼があると速断してよいかどうかという問題が残る。また、巻二の七のように「神鳴の病中」という章題が章末におかれた笑話を指し、小見出しの「欲心」が前半の人間の側の争いを指すといった乖離の例もあつて、目録を目にした読者はその透き間を埋める謎解きをせねばならない。

謎解きと言えば、巻二の一「因果」のように題との繋がりがおぼろに感じられるようではあるが、本文を讀んで、なお意味がよくわからぬままというものもある。小見出しに導かれて「因果咄」と得心すると言つたところだろうか。

以上いくつかの側面を見てきたが、結局のところ小見出しの性格はフレキシブルに考えるべきだということ

とになるうか。

最後に、方法や成立の側面からも、小見出しの性格を見ておきたい。以下、紙幅の関係で結論のみを述べることにする。小見出しは一つには、出来上がった咄を編集する際に全体のバリエーションを工夫するための手掛かりにする、という機能を持っていたと思われる(編集の側面)。第二に、西鶴が収集していた咄のネタ乃至咄そのものの整理見出しとして始めから西鶴の手にあつた、つまり西鶴の咄の引き出しにおける分類項目ラベルといった性格のものも含まれているのではないか、という見方も可能である(材料や咄のストックの側面)。第三に、章題の項でも触れたところであるが、いくつかの咄には三題話のように兼題があり、(小見出し)が先行した」という考えがあてはまるものもあるように思われる(咄の創作方法の側面)。こうした役割上の諸側面も、小見出しの性格の多様性に関係しているのではないだろうか。今後、方法論・成立論と揃めて考えたい課題である。

三

本節では、『西鶴諸国はなし』の内容を扱う。人物等を確認した後、現実性・笑話性・怪異性の三つの要素に注目して本書の性格を考える補助線としていたいと思う。その際、咄の中で用いられる個々の説話の類想パターンにも目を配る必要があると思うので、類話パターンの項を独立して設けることとした。以下、表2く4にそって各項目を見て行くこととするが、始めに断つたように各要素の分析考察に立ち入る余裕は無いので、詳論については別稿を期したい。

表2 人物等・現実性

巻・章	章 題	人 物 等	現 実 性
巻一の一	公事は破ずに勝	寺僧	衆徒の争い
巻一の二	見せぬ所は女大工	女大工 * 屋守 奥さま	
巻一の三	大晦日はあはぬ算用	浪人	合力 金の紛失 貧乏 義理
巻一の四	傘の御託宣	* 傘 後家	
巻一の五	不思議のあし音	盲人	月待ちの遊興 調子を聞く
巻一の六	雲中の腕をし	木食 ○海尊 ○小平太	
巻一の七	狐の四天王	* 於佐賀部狐 米屋	
巻二の一	姿の飛乗物	* 飛乗物 女	
巻二の二	十二人の俄坊主	○柔心 ○頼宣 *うはばみ	
巻二の三	水筋のぬけ道	下女 女房	
巻二の四	残る物とて金の鍋	* 生馬仙人 商人	
巻二の五	夢路の風車	男(奉行) 女商人 大力	
巻二の六	衆の男地蔵	男	誘拐
巻二の七	神鳴の病中	百姓 * 神鳴	
巻三の一	蚤の籠ぬけ	浪人 科人	牢内の高名話 芸尽し 訴訟
巻三の二	面影の焼残	娘 男	
巻三の三	お霜月の作り髭	同行 坊主	お取越 婿入り 託言

(一一一)

卷五の七	銀がおとして有	男	江戸下り 銀の拾得
卷五の六	身を捨る油壺	老女(山姥)	
卷五の五	執心の息筋	後妻 継子(幽霊)	
卷五の四	闇の手形	あばれ者 女 男	強姦 訴訟
卷五の三	楽の鱗鮎の手	出家 *鱗鮎	
卷五の二	恋の出見世	浪人 娘 商人	嫁入りの要請
卷五の一	灯挑に朝貞	楽助 客	茶の湯
卷四の七	鯉のちらし紋	*鯉 獵師	
卷四の六	力なしの大仏	車つかひ	
卷四の五	夢に京より戻る	女(精霊)	
卷四の四	驚は三十七度	獵師 子供	
卷四の三	命に替る鼻の先	*天狗 上人	
卷四の二	忍び扇の長歌	大名の姪 男	身分違いの恋
卷四の一	形は昼のまね	*人形(狸) 道化 楽屋番	
卷三の七	因果のぬけ穴	武士 しゃれかうべ	
卷三の六	八疊敷の蓮の葉	法師 ○信長 ○策彦	
卷三の五	行末の宝舟	馬方	
卷三の四	紫女	若侍 *紫女 くすし	

《人物等》表²

主要登場人物、異類、異形を記す。人間（及びその靈魂等）以外の、いわゆる異類・異形には「*」を、歴史上の实在人物には「○」を付す。異類・異形については後述の《怪異性》及び《類話パターン》の項を参照されたい。

人物の職種が多岐にわたり、武士が各巻に必ず配置されているなど、この項がバリエーションに富むことや、意図的に同じ色合いのものを分散させていることは、一目瞭然である。

三十五話中、歴史上の实在人物を扱ったものは

海尊・小平太（巻一の六）

関口柔心・頼宣（巻二の二）

信長・策彦和尚（巻三の六）

の三篇であり、それぞれ取り合わせを工夫している。これは周知の人物を単独に扱うことで咄が一つに収斂していく、あるいは咄の飛躍を封じられやすい、そういった咄の方向や制約を嫌う気分³の現れであろう。見方を変えれば、『西鶴諸国はなし』全体が題材を限定したストーリー性指向ではないことの証拠でもあろう。その他の人物に関しては、その無名性が全体の傾向として指摘できるが、武士が主要人物となる場合には、固有名詞を明確に与えている⁴。当然と言えば当然の操作ではあるが、武士に対するこの扱いは西鶴の一面を表しているよう。更に固有名詞の有無と内容との関係を見ると、笑話傾向の強い咄では、人物は無名あるいは一般的呼称で扱われ、怪異傾向の強い咄では、固有名詞を用意している。これらは他の西鶴作品にも通ずる点である。

《現実性》表²

現実の人間社会を描き、その種々に「不思議」（あるいは「笑い」）を見るもので、飽くまで人間世界か

ら逸脱しない咄を「現実性の強い咄」として取り上げ、その内容を記した。

人間観照の度合いは様々で、軽いスケッチに落ち込んだもの(巻一の五、巻三の三など)もあれば、テーマが限定され、ストーリー性の高いもの(巻一の三、巻四の二など)もある。一方で話材の珍しさが際立っているもの(巻二の六、巻五の七など)もあり、これらが混在している。この三番目に挙げたグループは、確かにありそうな咄だが同時に不可解さも備えており、作者の意図がつかみにくい傾向がある。但し最終章巻五の七は例外で、現実性に祝儀の気分を盛り込む意図が明瞭である。

表示した、現実性の強い十一の咄の中で、本書のキーワードでもある「不思議」の語は、三話(巻二の六、巻四の二(二例)、巻五の四)に見られる。この頻度は全体からみるとやや少ない。一方「おかし」は、全体で五例あるうち四例がこの十一話に見られ、現実性の強い咄に集中しているのがわかる(表3参照)。用語だけをとり出して結論づけるつもりはないが、おおむね人間世界から逸脱しない、怪に頼らない咄は、「不思議」よりも「おかし」の傾向が強い。その中で先の巻二の六、巻四の二、巻五の四の三話では、単なる笑いだけではなく「人間世界の不思議」を見ようとする作者の目が育つてきているように思われる。こうした「不思議」の発見は西鶴の咄の独自性として注目すべきであろう。

なお、この項の十一話のいずれにも題材・類話を指摘できるが、伝承や古典の裏付けを意識するまでもなく、それぞれが「当世の咄」として鮮明に自立していると言つてよいであろう。

《笑話性》表3

主観的判断により笑話性が認められるものを「◎」「○」の二段階によつて示す。併せて、本文に見られる「大笑い」「おかし」の語を掲出する。「◎」「○」のおおよその基準は構想・話材等に一定以上の笑いが認められるものとし、笑いのレベル及び一章全体にかかわる度合いによつて評価を加えた。言うまでもなく、本書では滑稽表現・当世化・スピード・機知・会話・現実性などに見られる軽口の気分が、程度の差はあれ、

『西鶴諸国はなし』綜覧

表3 笑話性・怪異性

巻・章	章 題	笑話性	想像画	戯画	怪異性	怪異小説他
巻一の二	公事は破ずに勝					
巻一の二	見せぬ所は女大工					伽婢子
巻一の三	大晦日はあはぬ算用				○妖怪(屋守)	伽婢子
巻一の四	傘の御託宣	◎			妖物(傘)	
巻一の五	不思議のあし音	○大笑い				
巻一の六	雲中の腕をし	○			登仙	伽婢子
巻一の七	狐の四天王	◎おかし	○		狐	新御伽婢子
巻二の一	姿の飛乗物		○		◎妖怪(女)	
巻二の二	十二人の俄坊主	大笑い	○		妖怪(うはばみ)	宗祇諸国物語
巻二の三	水筋のぬけ道		○		◎死体湧出 亡魂	新御伽婢子
巻二の四	残る物とて金の鍋		○		仙術	続齊諧記
巻二の五	夢路の風車		○		◎異郷 夢(亡魂)	新御伽婢子
巻二の六	楽の男地藏		○		(変化)	
巻二の七	神鳴の病中	◎		○	雷	新御伽婢子
巻三の一	蚤の籠ぬけ	おかしさ				
巻三の二	面影の焼残				○蘇生	伽婢子 宗祇諸国物語
巻三の三	お霜月の作り髭	◎おかし・おかしがり				

卷五の七	銀がおとして有	大笑い				宗祇諸国物語
卷五の六	身を捨る油壺		○		○妖怪(山姥)	新御伽婢子
卷五の五	執心の息筋		○		◎幽霊	
卷五の四	闇の手形					
卷五の三	衆の鱗鮎の手		○		形見 異類(鱗鮎)	宗祇諸国物語
卷五の二	恋の出見世					
卷五の一	灯挑に朝貞	○おかし				
卷四の七	鯉のちらし紋		○		○妖怪(鯉)	
卷四の六	力なしの大仏		○		怪力	伽婢子
卷四の五	夢に京より戻る		○		○精霊(藤)	伽婢子
卷四の四	驚は三十七度				◎殺生の報い	新御伽婢子 宗祇諸国物語
卷四の三	命に替る鼻の先		○		○天狗	伽婢子 新御伽婢子
卷四の二	忍び扇の長歌					
卷四の一	形は昼のまね				○妖物(人形 狸)	伽婢子
卷三の七	因果のぬけ穴				◎夢(亡魂の告) 首の消滅	
卷三の六	八疊敷の蓮の葉		○	○	異郷	宗祇諸国物語
卷三の五	行末の宝舟	○	○	○	◎妖怪(女)	伽婢子
卷三の四	紫女					

全編にわたって指摘できる。これらの部分的あるいは表現上の滑稽味、更に命名や性格設定のおかしみは表示に含まないものとする。

(一八)

本書の笑いの分析には表現上の問題と、素材の消化の仕方(転合化)を含めた一編の構想上の問題、さらには枕やオチといった咄の枠組みの問題等、いくつかの側面に分けて考えるのが妥当であろう。このうち構想に関しては、現在のところではまだ個々の咄の分析が必要な段階と考えているので、本稿では立ち入らない。また、表現や一編の基本的枠組みに関しては、第四節でその傾向を示したいと思う。ここでは、一話全体の笑話性がどの程度認められるか、という主観的判断による度合いを示すにとどめ、その笑いを醸し出している要素に若干触れておく。

笑話性を認められる咄は、艶笑譚・愚か者・強敵など題材自体が軽口咄の系統であるものが多い。但し必ずしも終始一貫して笑い咄というわけではなく、後半に、落とし咄をはめ込む、あるいは笑いの傾向の強い挿話を配することによって、全体が笑いに向かって収斂して行く、という構造をとる。巻一(四)や巻二(七)などは、この顕著な例と言えよう。巻三(三)なども一貫した笑話に見えるが、お取り越しや婿入りのスケッチが半分を占め、笑いは後半に集中している。笑いを醸し出す上で章末の果たす役割は大きいと言えよう。なお、最終章は、話材自体は笑話の系統であるものを、単なる軽口から人間の不思議に昇華させた咄で、例外的に考えるべきであろう。

本書の笑話の特徴を二、三加えておく。第一に、《人物》の項でも触れたが、登場人物の無名性が挙げられる。いわゆる軽口咄の特徴を引き継ぎ、その枠内にあることを示す一面と思われる。第二には、題材そのものが本来笑い咄の系統にあり笑いが題材に依拠している場合、むしろ表現上の滑稽・誇張などは押さえられるという傾向を指摘できる。第三に、笑いの部分を挿絵に依存していないことが挙げられる(巻一(四)、巻一(七)、巻二(七)などに明らかであるが、笑いのポイントそのものが画題になっているわけではない、あく

までオチは文章表現で示される)。第四に、教訓とは無縁であること(表4参照)、第五に、「おかし」という語が本書全体で五例あるうち、四例までが笑話と結び付いていることを指摘しておく。

《怪異性》表3

主観的判断により、怪異性が認められるものを「◎」「○」の二段階によって示し、併せて作品中の怪異要素を記した。怪異要素は、「人物等」の項で掲げた異形の他、亡魂・異郷・夢・蘇生など、現実生活の枠から逸脱するものを全て掲げた。

怪異要素が多彩に盛り込まれていることは一瞥して明らかであるが、西鶴の独自性として問題とすべきは、怪異要素があることと、読者に怪異性——現実からの逸脱感——をリアルに感じさせることがパラレルに対応しないことであろう。この点について、これまで主として西鶴の「哄笑的発想」や「俳諧性」と結びつけて論じられてきている。この問題を検討する前に、ひとまず怪異性の内容を一瞥しておこう。

怪異の要素としては、中世説話以来なじみ深い、異類・異形の系統(表では主に妖怪として示すもの)や神仏にかかわるものがあり、一方に仙境・神仙譚の類や、亡魂による報復(巻二の三、巻五の五など)に代表される幽霊説話などが見られる。いわゆる百物語系・伽婢子系・仏教系といった傾向のどれか一つに片寄ってはいない点を指摘できよう。当代の人々にとっては、やはり幽霊説話が最も新奇で題材の怪異性に引き付けられたかと想像するが、西鶴はむしろ、本書のカラーがその方向に染まることを意識的に避けているのである。西鶴には出自・質を含めてさまざまなレベルの「不思議」を、共に取り入れ消化して新しい咄を作り出す自負があったであろうし、そのことを通じて作品に変化を持たせる意図もあったであろう。このことは、表3に示した怪異性のバリエーションが端的に示している。巻ごとの変化で言えば、巻一が笑話仕立てや現実性の強い咄が多く、人物等の変化も大きいのにくらべて、巻二では、巻二の七に笑いを嵌め込むことでよ

うやくバランスを取るほど、全体に怪異の気分が強く、『新御伽婢子』への接近が見られ、巻三では再び現実・笑い・民話への接近が伺えるといった具合である。

五巻を通じて各巻に怪異性が際立つ咄が一話は配されていることは、現実性や笑いと共に、怪異性が本書の柱の一つであることの表れであろう。逆に言えば、いわゆる「怪異」と現実性や笑いに見る「不思議」とが、西鶴の中で一つの像を結んでいたかどうか、作品解釈の大きな分れ目になるはずである。本稿の目的から逸脱するので、この点に関する詳細は別稿を期したいと思う。怪異性のパリエーションを一瞥したところで、この項目の最初にあげた問題に立ち戻ることとする。

『西鶴諸国はなし』においては、さまざまな怪異要素が現実からの逸脱感と必ずしも結びつかない点を、方法上の問題として捉え、「怪異性の剝奪」と位置付けたい。この問題は、西鶴の咄の方法を明らかにするいくつかの鍵のうちの一つでもある。西鶴は意図的に（あるいは西鶴の体質的なものに根ざす場合もあるが）、怪異性を薄めているわけで、このことは同題材を扱った『伽婢子』、『新御伽婢子』の各話に当たるだけで、即座に了解できることである。西鶴の怪異性剝奪の方法についても、本稿ではいくつかの側面を指摘するだけにとどめておく。

第一は、巻一の一、巻一の一、巻一の七、巻二の五、巻二の七のように、笑話仕立てにすることで、変化（傘）や動物（狐）、異界（竜宮）などから怪異性を剝奪し、日常性にひきずりおろしてしまう方法である。多くは咄の終りに滑稽色を配することによって、笑話に仕立てていることは、笑話性の項で見た通りである。巻五の六もこの中に入れてよいかと思われる。

第二は、現実の、新奇な風俗と取り合わせることで、興味の対象をそちらに擦り替える、あるいは現実の強者をおくことで、怪異性の効力を薄める方法である。巻一の二「見せぬ所は女大工」では叡山の札や守宮という別の仕掛けもあるのだが、読者の興をそそるのは、「大工」という職業婦人の珍しさであろう。そこで

は変化をなす守宮の怪異性そのものは薄められて提示された上、その女大工によって退治されるのである。同じ取り合わせでも、巻二の二「十二人の俄坊主」は、より力のある者を配している。ここでは、関口柔心などの名人咄や頼宣の武勇が取り上げられるのだが、怪異要素である「うわばみ」は頼宣を恐れる——即ち頼宣の下位に置かれることによって、妖怪の怪異性は威力を半減されるのである。更にこの咄では蛇に呑まれた者たちも命に別条はなく、皆一様に坊主になるという結末で笑いの気分となり、緊迫感は一氷解している。怪異性の剝奪を考える際、このような取り合わせの妙は大いに注目すべきであろう。

第三として、怪異性と好色性の取り合わせを挙げておきたい。第一の例として先に挙げた巻一の四もその例に漏れないが、怪異要素のあるもののほとんど全てにおいて、西鶴は男女の色恋沙汰に筆を及ぼしている。そのことで俄然咄の世界が現実性を帯び、卑近なものになって、超現実性を希薄にしているのである。他の怪異小説に見られない、西鶴の独自性と言うべきであろう。

以上三つの側面を指摘した。今、具体例は全て省略するが、このほかにも語り口の問題や、緊迫感を和らげる挿絵の働き、怪異小説にありがちな教訓性をもたないこと(表4参照)、全体で十七例に及ぶ「不思議」の語を怪異要素には直接結び付けない傾向、エピソードの自然な連ね方によって超現実性をそれと気付かせずに読者に受け入れさせてしまう咄の技法、章末に後日譚や第三者の評を入れることで咄を過去のものとし、緊迫感を削ぐ方法等々、怪異性を剝奪する手だては数多く指摘出来る。このように見てくると、逆に怪異性を維持し、それが際立つ咄が、本書の中では逆に特殊であることが見えてくるようである。

なお表3の「怪異小説他」の項であるが、主として『伽婢子』『新御伽婢子』『宗祇諸国物語』の中で、本書と共通性が見られる咄があるものを表示した。本書執筆にあたって西鶴が『新御伽婢子』を意識していたことは、疑いない。ここでは内容には触れないが、右の三書を本書と並べて見ることによって、西鶴独自の怪異要素の料理の仕方——特に怪異性の剝奪や咄の取り合わせ、当代性など——が明確になるように思われる。先行怪異小説(中でも『伽婢子』『新御伽婢子』)や『宗祇諸国物語』との関係性は、今後本書の成立を

「西鶴諸国はなし」綜覧

表4 教訓・評・類話パターン

巻・章	章 題	教訓	評	類話パターン
巻一の一	公事は破ずに勝 見せぬ所は女大工			狡智 訴訟 学頭の知恵
巻一の二	大晦日はあはぬ算用		○	悪霊退治 占い 夢中の怪
巻一の三	傘の御託宣			機知
巻一の四	不思議のあし音			飛神 愚か村 付喪 妖物退治 艶笑 託宣
巻一の五	雲中の腕をし			調子の占 観相 名人咄
巻一の六	狐の四天王			長生 神仙譚
巻一の七	姿の飛乗物			狐の報復 髪切
巻二の一	十二人の俄坊主			化物話
巻二の二	水筋のぬけ道			名人咄 神罰 蛇に吞まれる
巻二の三	残る物とて金の鍋			死霊復讐 嫁が淵 吝気
巻二の四	夢路の風車			神仙譚
巻二の五	楽の男地蔵			隠里 仙郷 夢の告
巻二の六	神鳴の病中		○	神隠し 誘拐 訴訟
巻二の七	蚤の籠ぬけ		○	跡目争い 名刀 雷石 水論
巻三の一	面影の焼残		○	牢の高名咄 訴訟 夜盗
巻三の二	お霜月の作り髭			蘇生 占い 出家
巻三の三				強戯 墨塗り

(一一一)

卷五の七	銀がおとして有	○		正直(笑話) 物を拾って幸福となる
卷五の六	身を捨る油壺		○	山姥 油盜
卷五の五	執心の息筋		○	継子譚 幽霊復讐
卷五の四	闇の手形		○	訴訟 機知
卷五の三	菜の鱗鮎の手			地名起源 動物の援助 形見の衣
卷五の二	恋の出見世			子別れ
卷五の一	灯挑に朝貞		○	茶の湯 愚か者
卷四の七	鯉のちらし紋	○		怪魚 異類婚姻 魚女房
卷四の六	力なしの大仏			力競べ 名人咄 大小比較 鍛錬
卷四の五	夢に京より戻る	○		草木譚
卷四の四	驚は三十七度			殺生戒 鳥塚起源
卷四の三	命に替る鼻の先		○	僧が天狗となる さとりのわっぱ
卷四の二	忍び扇の長歌			恋
卷四の一	形は昼のまね		○	生きて働く作り物 狸
卷三の七	因果のぬけ穴		○	敵討 夢の告 因果応報
卷三の六	八畳敷の蓮の葉			竜の昇天 法話
卷三の五	行末の宝舟		○	竜宮 魂還 神隠し 巧智
卷三の四	紫女			妖怪 異類婚姻か

考える上で欠くことの出来ない視点である。

(二四)

《教訓》《評》表4

現実性・笑話性・怪異性と、教訓や評との同居の度合いを見るために、「教訓」や「評」が書き込まれている咄にそれぞれ「○」を付した。

《類話パターン》表4

説話の典型的類話パターンを示す。同時に、「占い」・「訴訟」など必ずしもそれがメインとなって独立した咄を構成するわけではないが、咄の展開上よく見られる要素をも併せて示した。

表示はいずれも厳密なタイプインデックスに基づくものではないが、おおよその傾向をつかむことは可能である。即ち、限定されたいくつかの咄を取り出して、その素材や方法に説話(民話)の影響を強調することさらに感じられるほど、西鶴は総ての咄に自然に説話を取り込んで利用しているのである。言葉を変えれば、西鶴はある面で正しく、説話文字の延長線上にいますというべきであろう。西鶴のオリジナル性は一話を構成している咄のパターンそのものにあるのではなく、むしろその組み合わせ方や題材の消化の仕方にあるのである。問題とすべきは、類話のパターンを踏まえた上で、何が西鶴らしさなのか、『西鶴諸国はなし』の新しさとは何かを検証することであろう。なお、類話パターンの表示内容を腑分けしていくことも、作品のバリエーションをつかむ上で何らかの意味があるかと思われるが、ここでは省略する。ただ、内容が多岐にわたり(笑話、民話、伝承、仏教説話、怪異説話等)、編集上変化に留意していることを確認しておくのとどめる。

なお、内容上関連があると思われるのでここで触れておくが、表現の上では明確には示されていない、隠された副主題ともいうべきものがある。即ち、仕掛けられた(隠された)咄の要素であって、『西鶴諸国はなし』

し」の性格上重要なものである。ここでは結論のみを述べる形になるが、一例を挙げておく。

卷一の二「見せぬ所は女大工」は、釘にとじられた守宮が生きていたという素材を核に「悪霊退治、夢都を守るはずの「叡山」のお札が元凶という皮肉を効かせることで咄を締め括っている。しかし、文中に現れたこれらの要素以外に、隠し題として「奥向きの女の独り寝」がきいていると思われるのである。「登場人物が女性のみ」であるとか、「貞操を守る守宮」とか、「奥向きの舞台設定」といった記号は、総て恋を示唆している」と読めば、西鶴の仕掛けた「恋」という隠し題が浮かび上がってくる。

裏で恋を意識した咄は、他にも六篇ほど見出すことができる。つまり咄の内容に関して、一読了解される類話パターンだけでなく、そこに加えられた西鶴らしさを読み解く必要があるのである。この点は他の怪異小説類には見られない西鶴独自のものと言えよう。

四

これまで形態および内容の側面から項目を立て、説明を加えて来たが、その中で自ずから方法にかかわる領域に言葉が及んだものも多い。本節では、咄としての構造上の装置や表現上の技法といった、目に見える方法を一瞥し、構想にも目を向けることで、本書を方法の面から分析するための視点(項目)を提示したい。具体的項目は表5〜6に示す通りである。このうち、「時代」「土地」は、内容の一環として処理すべきであるが、西鶴の咄ではこれらの設定に意図的計算が見られ、方法との関連が深いと考えられるので、あえて本節で扱うこととした。「座」以下「列挙」の項は、表現上の技法のいくつかを綜覧しようとしたもので、一括して項目解説および表示の基準を述べる。「章首」「章末」は、構造上の装置を把握する意図で立てた項目

表5 時代・土地・表現上の技法

巻・章	章 題	時 代	土 地	座	会話	誇張	滑稽	好色	列挙
巻一の一	公事は破ずに勝		◎奈良	○	○				
巻一の二	見せぬ所は女大工		◎京	△	○				
巻一の三	大晦日はあはぬ算用		◎江戸	◎	○				
巻一の四	傘の御託宣	慶安二	○掛作 ○肥後	○	○			○	
巻一の五	不思議のあし音		○伏見	◎	○				
巻一の六	雲中の腕をし	元和	○箱根	◎	○		○		○
巻一の七	狐の四天王		◎姫路		○				○
巻二の一	姿の飛乗物	寛永二〜慶安四	摂津		○	○		○	○
巻二の二	十二人の俄坊主		◎紀伊	○	○				○
巻二の三	水筋のぬけ道	正保	○若狭 ○秋篠		○				
巻二の四	残る物とて金の鍋		○生駒	△	○				
巻二の五	夢路の風車		飛騨		○				
巻二の六	楽の男地蔵		◎京			○			
巻二の七	神鳴の病中	正保	浅間		○		○		
巻三の一	蚤の籠ぬけ		駿河 ○京	○	○				
巻三の二	面影の焼残		京			△			
巻三の三	お霜月の作り髭		◎大坂	○					

卷五の七	銀がおとして有		◎江戸	△	○				
卷五の六	身を捨る油壺		◎平岡	○	○				
卷五の五	執心の息筋		南部		○				
卷五の四	闇の手形		木曾	○	○				
卷五の三	菜の鱗鮎の手		○鎌倉 大淀						
卷五の二	恋の出見世		江戸	△	○				
卷五の一	灯挑に朝貞		春日	○					
卷四の七	鯉のちらし紋		○河内		△			○	
卷四の六	力なしの大仏		○鳥羽			○			○
卷四の五	夢に京より戻る		○堺			○			
卷四の四	驚は三十七度		鹿島		○				
卷四の三	命に替る鼻の先		◎高野山		△				
卷四の二	忍び扇の長歌		○江戸		○				
卷四の一	形は昼のまね		◎大坂					○	
卷三の七	因果のぬけ穴		但馬						○
卷三の六	八畳敷の蓮の葉		○吉野	◎	○				○
卷三の五	行末の宝舟		○諏訪	○	○		○		
卷三の四	紫女		○博多		○			○	

である。「咄の並列」は、素材や内容とのかかわりが深く、個々の咄の精密な読みの上で判すべきものであるが、ここでは構想上の方法として捉え、現時点での私の判断を示すことで大まかな傾向を見ておくこととした。

以上、本節での各項目によるアプローチが、既に第二・三節で触れた方法に関する部分と併せて、西鶴の咄の方法を考えて行く補助線となることを期したいと思う。

《時代》表⁵

表示したように、年時を明示しているものは、巻一・二の五編で、元和から慶安までに限定される。^(註)とはいえ、咄の内容がある特定の年と結びつく必然性は無く、かなり恣意的な一面があるように思われる。年時が明示されている五つの咄には、内容的にどのような傾向が見られるであろうか。少なくとも、この五編は現実性の強い咄ではない。同時に当代まで継続性がある咄ではなく、一回性の出来事、あるいは過去のある時点で完了した咄である。登場人物で言えば、頼宣・信長・井上播磨といった、實在感があり年代を特定できる人物や、奉行の登場する咄ではない。舞台で言えば三都あるいは読者になじみの深い、繁華な場所や、特定の限定された場所でもない。即ち、人物や舞台に流動性があり、それだけでは實在感や説得力が希薄になりがちな咄、民話・神仙譚・説話に依拠しており、近年の咄として再生させるためには何らかの連続性が必要な咄に、年時を配して見せたように思われる。

元和偃武以降のやや古い時期に設定したのには、それなりの理由があるろう。今、私に結論のみを述べれば、

第一に、現実性の強い当代の咄の間に置くことで、時間的変化をねらった。

第二に、民話や説話の再生という面では、当代に近すぎない方が説話性が温存されることになり、効果的である。

第三に、『新御伽婢子』で年代が明記されているものほとんどが万治・寛文・天和であることを意識

し、それよりもやや逆上る時期に設定した。

といった複数の要素が絡んでいるように思われる。一方でこのような配慮をしているにもかかわらず、年時を明示しているのが巻一・二に限られるのは、「新御伽婢子」と比較しても甚だバランスに欠ける。例えば巻三の五などは、過去の一回性の出来事で同時に民話伝承を踏まえるなど、年時を明示した五編と内容上共通するものがあるのであるが、当事者の一人を「今に命のながく目安書して……」と描く形で実在感を持たせ、説得力を与えている。この咄では、わざわざ年時を書き込む形式を取ろうとしていないのである。

五編に年時を与えている巻一・二は、五巻の中ではむしろ例外的で、巻頭であるがゆえに形式を整える配慮が働き、民話・説話色の強い咄に元和偃武以降三代將軍の御世までの年時を配した、という見方もできようである。いずれにせよ、成立問題とのつながりも考慮せねばならないと思われる。

《土地》表⁵

目録の記載と諸国分布については前節で述べたので、ここでは内容や方法との関係から見た土地の設定に触れておく。表は舞台となる土地(国名または地名)を示す。二つの土地にまたがる場合は併記する。土地と内容とのつながりについて、その土地を選ぶ必然性が読者に了解されると考えられるものには、程度に応じて「◎」、「○」を付す。その際、必然性はあっても、それが一話の中の部分的エピソードとのつながりにとどまる場合や、素材の説明無しでは即座に伝わりにくいものは「○」とする。評価は私の判断によるものであるが、巻一の一や巻二の二など、咄の舞台として他に動かしやうがないものが一方にあり、他方に明らかに土地のイメージや伝承を利用したものがあなど、大半はそのつながりを承認できよう。

西鶴が土地の選択・指定に意を用いているのは一読して明らかである。一、二の例を挙げれば、咄の展開に占いを用いるのは京都が舞台の咄に限ること、同じ山中でも箱根・生駒・木曾などを明確に使分け

ることなど、随所にその周到さを伺うことができる。

また、表4の類話パターンの項を参照するだけでも了解されようが、複数の土地に類話伝承が伝わる例があるわけで、咄に⁽¹³⁾応じて意図的に一つの土地を選びとっていることは念頭に置くべきであろう。

方法にかかわることであるが、土地の伝承を明示し、咄の展開に利用しているものは、一〇例ほどある。但しこれらの伝承(生馬仙人、諏訪湖の神わたり、内助が淵など)自体は、咄の内容とは一致しない場合がほとんどであることに注意すべきであろう。論証は省略するが、土地に結び付いた伝承を積極的に取り込むことで、咄に説得力を持たせ、当代に再生させると同時に、西鶴独自の咄の世界に読者を引き込む導入の具としていえると言えよう。

右に挙げた一〇例は、咄を自立させる上で土地伝承を利用していると考えられるものであるが、これとは逆の手順を踏んでいる咄もあるようである。即ち土地に依存せず土地を限定しない形で、先に咄が出来ていたと思われるもので、巻二の五、巻二の七、巻三の七、巻四の四、巻五の五など、表の無印の咄の多くがこれにあたる。笑話仕立ての一例(巻二の七「神鳴の病中」)を除き怪異性が顕著であり、いずれも地方に配されている。咄自体が独立してはいるが、逆に言えば西鶴らしさが希薄で話材がこなれていず、仕掛けのおもしろさが見られない咄と言えよう。中で巻四の四「驚は三十七度」は殺生戒に「友よび雁」という珍しい風俗を取り合わせて、かろうじて土地とのつながりを確保しているように見える。西鶴の咄と舞台設定とが常に密接に結びつくわけではないことは、その方法を追求する上で注意すべきであろう。

土地の選択・指定において、特定の土地であることの必然性が希薄な咄では、内容上次のような特徴が見られる。即ちおおむね題材それ自身の説話性に依存しており、一章全体の変化が乏しく、モノトーンであるという印象を免れないのである。結論のみを述べる形になるが、土地の設定にこだわらず、土地と内容を深くかかわらせる方法は、「素材をあらぬものに作りなす」という西鶴らしい咄の手法と深く結び付く場合において、より強く發揮されると言えるのではないかと思われる。

《表現上の技法》表 5

表現上の技法として座・会話・誇張・滑稽・好色・列挙の六つの項目を立て、該当するものに一〜三段階の評価(「◎」、「○」、「△」)を付した。それぞれの項目の内容および評価基準は以下の通りである。

座——三人以上が一同に集まって座を形成するもの。咄との関係は左のいずれかで、咄の展開を担う程度座と認められる度合に応じて、私に三段階の評価を行う。

○法話など特定の性格設定のなされた場で、構成員の一人(僧侶など)によつて咄が語られていくもの
○座の構成員がそれぞれにエピソードを披露するもの

○座の共通体験を構成員の一人が語るもの

○座中の咄のやりとりを写し取るもの

会話——ほとんど全編にわたり口語表現が見られるが、相互に受け答えのあるもののみを取り上げ二段階の評価を加える。

誇張——オーバーな形容といった、静止した一つの表現にとどまるものではなく、形容・例示などが次第にエスカレートして誇張されていく例。俳諧的手法と言えるが、ここでは表現技法の一つとして捉え二段階の評価を加える。

滑稽——題材や構想上の笑い(素材の転合化など)ではなく、部分的表現上のおかしみ、茶化しや言葉遊びに近いもの。中で色事をかすめるものは「好色」の項に入れる。

好色——題材としての好色ではなく、主に会話中の表現に好色性を取り込むもの。咄を現実次元にひきおろし、笑いを醸す効果をもつ。

列挙——部分的表現に物尽が見られるもの。

右の項目のうち、座と会話の項目を掲げた理由は、百物語の伝統の枠組を意識したからではなく、むしろ

集まって評判する、あるいは談話するという咄のプリミティブな形に注目した結果である。「会話」を重視したのは、そのためである。座の会話により咄が展開していき、その座に集う人々次第で咄の方向が自在に変化する気分を一話の中で維持する、というのは、単純なスケッチに見えてその実周到な用意や構成能力が必要とされる。「座と会話と咄の展開」がうまく噛み合っている咄には、リアルタイムの咄の臨場感と自由な気分を重視した作者側の計算が十二分にあり、そこに始めて読者を巻込んだ形での共有空間が生まれ得るといえよう。咄の中心にこの方法が見られるのは、巻一の三〜六および、巻三の六「八畳敷の蓮の葉」ということになろうか。今、個々の咄に立ち入る余裕はないが、座の設定が成功し、会話が咄の展開にうまく機能すれば、誇張・滑稽・好色・列挙等の表現上の手だてがなくても、十分リラックスした、時に笑いを含んだ臨場感が成立するのは、表に見る通りである。

〈章首〉表 6

章首(枕)を構造上の装置と捉え、そのパターンを、1 登場人物等の紹介、2 伝承・伝説、3 評・教訓・諺等、4 風俗流行・風景季節描写、5 類例、6 その他、の六種に分けて整理した。

博多・吉野・生駒・鹿島など地方が舞台の咄では、風俗や風景描写を枕におく傾向が見られるが、当然の配慮であろう。章首がそのまま一つの挿話になっていて導入としての役割を越えているものもあるが(巻四の六など)、西鶴は型としての枕が必要だという意識を必ずしも持っていたわけではないと思われる。巻五において、章首に教訓や評が置かれ、章末が登場人物の死や消滅で終る咄が続くが、これらがあまりに「枕で始まり亡魂の消滅で終る」という型通りであることが、かえって特殊に感じられる。

〈章末〉表 6

章末も章首と同様、構造上の装置という見方をしたい。章末については、西鶴の他の作品にも、急激な逆

転やはぐらかし等いくつかの特色を見出すことができ、それらをどう捉えるかが作品理解の一つの鍵でもある。『西鶴諸国はなし』では、各咄の完結性が他の西鶴の作品に比べて高いのであるが、それだけ終らせるための装置に意を用いていると言えよう。実際に、他の怪異小説と異つて教訓で締め括る例は無く、三十五話それぞれに終り方を工夫している様相が表からも見て取れる。

表には「後日」・「オチ」「評」「結末(死・消滅・登天など)」「奉行」「○○起源」などと記したが、それらの内容は、次のようなパターンとして把握できる。

1 笑話のオチおよびそれに準じるもの(オチ)と表示したものは、笑話のオチのように、落差がありそれまでの咄の内容を無効にする力がある、というわけではなく、飽くまで咄をこわさない範囲で咄を笑いで締め括っているものである)。

2 主要人物・異類などが消滅・登天・死によつて姿を消すもの。咄の緊迫感やスピードをこわさず、読後もその余韻が残るもので、当然ながら亡魂が関わるものが多い。一つの結末の型として位置付ければ、巻一の二、巻二の一などもそのバリエーションと捉えることも可能である。ただ、この場合は後日譚を付加する形をとつて怪異性を和らげている。

3 結末に力や知恵のある人物を登場させることによつて、問題が一挙に解決という力業で終る形。「人物」はこのパターンの約十二話中五例が奉行である。必ずしも最後の一行というわけではないが、終り近くになって実質的に問題を解決する人物も加えれば、巻一の二の女大工、巻一の四の後家、巻二の二の頼宣等々が挙げられる。これらの人物が咄を締め括る役割を担っていることは明らかで、咄の中の一つの装置と見ることが可能である。

次の二つは、咄自体が結末を迎えた後に説話的結構を付け加えているパターンで、右の1、3とは位相を異にするものである。

4 後日譚を付加するもの。登場人物に擦り替わつて、語り手が咄を引き取る形をとる。それまでの咄の

表 6 章首・章末・話の並列

巻・章	章 題	章 首 (枕)	章 末	話の並列
巻二の一	公事は破ずに勝	伝承・伝説 登場人物の紹介	奉行 後日	
巻二の二	見せぬ所は女大工	登場人物の紹介	結末(焼く) 後日	
巻二の三	大晦日はあはぬ算用	登場人物の紹介	評	
巻一の四	傘の御託宣	登場人物の紹介	艶色オチ	○
巻一の五	不思議のあし音	伝承・伝説 登場人物の紹介	オチ	●
巻一の六	雲中の腕をし	登場人物の紹介	結末(登天)	●
巻一の七	狐の四天王	登場人物の紹介	(オチ)	●
巻二の一	姿の飛乗物	登場人物の紹介	後日	●
巻二の二	十二人の俄坊主	評・教訓・諺等	結末(オチ)	○
巻二の三	水筋のぬけ道	登場人物の紹介	結末(死)	
巻二の四	残る物とて金の鍋	風景描写 登場人物の紹介	第三者の解説(生馬仙人伝承)	
巻二の五	夢路の風車	評・教訓・諺等 その他(隠れ里の紹介)	後日	
巻二の六	衆の男地蔵	登場人物の紹介	評	
巻二の七	神鳴の病中	評・教訓・諺等	オチ	○
巻三の一	蚤の籠ぬけ	風景(季節)描写 登場人物の紹介	奉行	
巻三の二	面影の焼残	登場人物の紹介	評	
巻三の三	お霜月の作り髷	登場人物の紹介	(オチ)	

(三四)

卷三の四	紫女	風景描写	後日(消滅・命拾い)	
卷三の五	行末の宝舟	評・教訓・諺等 伝承・伝説	後日(オチ)	
卷三の六	八畳敷の蓮の葉	風景(季節)描写 登場人物の紹介	語り(例示)おさめ	○
卷三の七	因果のぬけ穴	登場人物の紹介 評・教訓・諺等	結末(死)	
卷四の一	形は昼のまね	風俗流行 その他(播摩紹介)	オチ 語りおさめ	●
卷四の二	忍び扇の長歌	風景(季節)描写	後日(出家)	
卷四の三	命に替る鼻の先	評・教訓・諺等	後日	○
卷四の四	驚は三十七度	評・教訓・諺等 風俗流行	鳥塚起源	
卷四の五	夢に京より戻る	風景描写 登場人物の紹介	後日	
卷四の六	力なしの大仏	類例	後日(オチ)	
卷四の七	鯉のちらし紋	その他(評判 池の紹介)	里人の評	
卷五の一	灯挑に朝貞	風景(季節)描写 評・教訓・諺等	第三者の評	○
卷五の二	恋の出見世	登場人物の紹介	奉行	
卷五の三	楽の鱗鮎の手	登場人物の紹介	地名起源	
卷五の四	闇の手形	評・教訓・諺等	結末(死)	
卷五の五	執心の息筋	評・教訓・諺等	結末(消滅)	
卷五の六	身を捨る油壺	評・教訓・諺等	オチ	
卷五の七	銀がおとして有	評・教訓・諺等	後日(祝言)	

部分を独立させ、語りの時点から切り離して過去のものにしていくと言えよう。先の2、3と抱き合わせになっている例もある。咄を過去の奇談とすることで、意図的に曖昧化する、怪異性や緊迫感を剝奪する、といった効果が見られる。

5 第三者の評、解説、語り手の感想などを置く形。4と同様、咄を一旦終らせた後、評を入れて完結させている。この評・解説・感想などは短い、咄を搦め取って咄の内容を相対化させる機能を果たしている。怪異性・緊迫性を剝奪しているのは4と同じである。

以上、私に五つのパターンに分けてみた。その他、咄の締括りを土地の伝承と結び付けるもの（巻二の四巻四の四、巻五の三等）は4のバリエーションではあるが、独立させて考える必要がある。また、巻四の一のように、3と2が抱き合わせになった形の上に浄瑠璃の語り納めを洒落で加えるような例もあり、表6で示したような単一な捉え方が不都合なのは言うまでもない。ただ本稿では、章末を装置として捉えた上でその様相を大まかに把握し、内容や方法を同時に見渡すことができれば十分であろう。

《咄の並列》 表6

本書には、いくつかのエピソードが連なって一話を構成する際、挿話が独立性を保ち、それぞれが並列しているの見做せるものがある。この傾向が顕著なものに「○」を付した。一方、同じシチュエーションで具体例を重ねていくような場合で、各挿話が同じレベルにとどまり、大きな飛躍・転換がないものには「●」を付した。

評価の大まかな基準は、

○ ストーリー性の高い咄で、挿話がその一部として組み込まれているものは、部分としての独立性が多少あっても並列と見做さない。

○ 一章全体が一つの咄としてのまとまりを持つが、ストーリー指向ではなく、各挿話の素材や挿話相互の

結合の様相がある程度透けて見えるものは、並列と見做す。というものである。

この項目は西鶴の咄の方法を考える上で不可欠な視点であり、それだけに咄の並列の具体的様相をさまざまな角度から分析する必要がある。今思いつく視点を列挙すれば、ストーリーへの吸収のされ方、取り合わせの落差、各挿話をつなげる機能(俳諧的連想、土地への結び付き、主人公の設定など)の強弱、業くらべ型など咄の運びの類型等である。一例を挙げると、取り合わせについては「水争いと笑話」(巻二の七)、「殺生戒と新風俗」(巻四の四)、「水筋伝承と亡魂」(巻二の三)等にその奇抜さを見てとることができる。ただし取り合わせを問題にする際には、話材の取り合わせの妙を楽しむレベルと、別ジャンルの咄(仏教説話、民話、中国系怪異譚、笑話等)を意図的に組み合わせようとするレベルがあることは、留意すべきであろう。いずれにせよ、『新御伽婢子』などで一話が一つの話題に終始しているのに比べると、『西鶴諸国はなし』には咄の並列性が顕著であり、そこに西鶴の独自性を伺うことができる。

付記

本稿の作品分析の表は、一九九四年五月の日本近世文学会春季大会において行った研究発表「西鶴諸国はなし」の成稿をめぐって——構想と成立試論——の際、参考として付したものに加筆補訂したものである。発表時には表の内容にほとんど触れることが出来なかったこともあり、改めて若干の解説を加えて提示することとした。御教示、御叱正を賜れば幸いである。

【注】

- 1 これまで分類整理の試みがなされないではなかったが、いずれも同一視点による明確な分類基準や方法に

扱ったもの、あるいは全編を網羅したものとは言い難いのが実情である。

- 2 江本裕編『西鶴諸国はなし』一九七六年4月、桜楓社、一三ページ。
- 3 現段階における素材探求の成果は、江本裕・谷脇理史編『西鶴事典』（一九九六年12月、おうふう）の「出典一覽」（担当 川元ひとみ）にまとめられており、この方面の整理は地固めの終った段階と考えている。
- 4 従って第二章以下では、本文が一・五丁または二・五丁であれば絵は半丁、本文が一丁、二丁または三丁であれば絵は一丁となる（第一章はそれぞれ一丁及び半丁となる）。なお、この形に注目した宗政氏の左の論説がある。同論の検討を含めて、別の機会に論じたい。

宗政五十緒「西鶴諸国はなし」の成立（野間光辰編『西鶴論叢』一九七五年9月、中央公論社 所収）。

- 5 周知のように、『本朝二十不孝』巻一の四「戀み改て咄の点取」に「其比は咄作りて点取の勝負はやりしにおりふしの兼題に、「還咲の花の陰に哀にをかし物」、「初霜の朝に四人泣は悲しき物」、「世の中にあればいやな物、なければほしき物」、「はじめおそろしく中程はこはく後はすかぬもの」、「時雨の夜は跡先のしれぬ物」、此五つの題を取てあけ暮案じ入……」とある。

- 6 例えば巻五の二では、素性を明かさな浪人の娘を「此娘の美人、東に見た事もない姿」と描写しているが、その「美人」をそのまま小見出しに据えている。「恋」・「殺生」・「茶湯」・「幽霊」などは説明を要しないであろう。

- 7 例外が二つある。そのうち巻五の二の浪人は、名を秘すところに不可思議さが生じるという設定で、無名。巻四の二の男女が名を明示しないのは、モデルとの関係もあるうか。こちらは「下級武士、醜男」という設定と相俟って、無名であることが、男の相対的立場の低さを表す効果をもたらしていると思われる。

- 8 先に《現実性》の項で、現実性の強い十一話と「おかし」の語との結びつきが強いことを指摘したが、笑話性の認められる八話と「おかし」の結びつきの度合は、それをやゝ上回る。

- 9 後述（第四節《章末》の項）。

- 10 表の記載は私の判断によるもので、伽婢子・新御伽婢子に関しては、『西鶴事典』出典一覽（前掲注3）の指摘とは視点が異なるせいか異同が多い。

- 11 テキストの表記は「屋守」であるが、やもりは「守宮」の表記を媒介にして、「もりのしるし」伝承と結びついていると考える。『俳諧類船集』によれば宮守ヤモリと血は付合である。
- 12 恋を意識した咄作りと関連するが、挿話の取り合わせとしての怪異性と好色性について、先に《怪異性》の項で、怪異性の剝奪という観点から若干触れた。
- 13 宗政五十緒氏は全掲(注4)論文で、「巻一、二の諸章は主として江戸初期をその時代に設定していたといえるようである。そして、このことは巻一、二のみならず『諸国はなし』全体の基本的な時代設定にも、例外はあるけれども、通じるようである。」とされる。が、筆者は見解を異にするものである。
- 14 一例を挙げると、土地との結び付きに一見必然性が見える巻一の七の於佐賀部狐の類話には、源九郎狐や小左衛門狐が思い浮かぶし、巻四の七の鯉の説話には摂州網島大長寺の鯉塚の由来(寛文八年)や伊勢の浦の小僧円魚の伝承(『奇異雑談集』)(以上二点近藤忠義氏指摘(日本古典説本9『西鶴』、一九三九年、日本評論社)、更に鳥羽の恋塚などの類話がある。
- 15 野間光辰氏は「西鶴五つの方法」(『西鶴新新放』一九八一年八月、岩波書店 所収)で、枕の型を分類し、巻四の六「力なしの大仏」の章首を「連ね枕」とされるが、用語として「枕」にこだわるのが西鶴の意図に適うのかどうか疑問である。

北星学園大学文学部 北星論集第35号 正誤表

頁・行目	誤	正
64頁23行目	るによって	ることによって
188頁1行目	「屋守」	「屋守」
186頁1行目 (折り込み)	笑話__	笑話性
186頁1行目 (折り込み)	現実__	現実性